

しんりゅうほんらんでいじよ  
神龍本蘭亭序

三五三年

(東晋・永和九年)

金石書画拾遺 (24)

木 雞

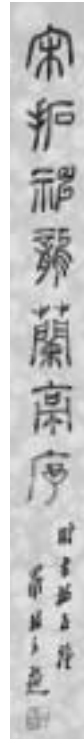
しんりゅうほんらんでいじよ  
神龍本蘭亭序

木 雞 室

伊 藤 滋



書聖・王羲之の行書の最高傑作とされる『蘭亭序』の原蹟は存在せず、臨模本や刻本が伝来するのみである。この『宋拓神龍本』は、明の豊坊刻本とも異なる。この本は、大正二年癸丑の年の京都蘭亭会に出品された。その模様を報じた大阪朝日新聞の大正二年四月二





十日の記事によると、四種類の「蘭亭序」の名品が紹介されている。その一つは犬養木堂翁所蔵の『宋拓定武本』、もう一つは内藤湖南蔵の『宋拓神龍本』、あとの二件は羅振玉蔵の『宋拓定武游丞相本』と『宋拓開皇本』である。そのうちの内藤湖南蔵本がここに示したものである。跋文を見ると所蔵者は久野錦浦とある。惜しいことに、この本は、巻末の四行が旧くに失われ、清朝初期に金石家王澐により補書されている。拓墨も明以前の旧いものであり、宋拓と称するに相応しい書品を具えている。王澐、李鴻裔、朱福清、趙烈文、吳雲の鑑賞印や題記があり、大正二年に羅振玉内藤湖南の跋文が付された。この帖は大正の蘭亭会の折にコロタイプ折帖装で油谷博文堂から一度だけ出版された。この印刷本すら非常に珍しい。現在は、平凡社の『書道全集』巻四にこの印刷本から転印されている。

# 書道芸術院 第1回展 出品作家



15×22cm

## 比田井 南谷

比田井天来が中学の歴史の教科書にも載るほどの書家であり、南谷氏は天来のご子息(次男、明治45年生まれ)で、やはり著名な書家であることは10代の頃から知っていました。私が書を志した20代の初め頃、東京・上野の美術館で先生をお見かけしたので覚えています。しかし、その後お目にかかる機会はありませんでした。

昭和20年に発表された前衛的な作品「電のヴァリエーション」を初めとする南谷氏の作品や書暦については多くの書籍、雑誌に書かれています。今回の原稿を書くに当たっては、存じ上げない南谷氏を知りたいと思い、先生のお嬢さんと出版社のオーナーでもある和子さんから、DVD「比田井南谷」と、南谷氏自ら編纂された自伝史とも言える「NANKOKU HIDA I」をお借りしました。その中で特に印象に残ったことを書いてみようと思います。

南谷氏は少年時代から音楽に対する関心が高く、バイオリンを習って20歳の頃にはプロの域に達していました。しかし父・天来に説得されて音楽への道を断念し、昭和30年代頃からは欧米、特にアメリカのアーティスト達との交流を深めて、「サン・パウロ・ビエンナーレ展」を皮切りに、多くの展覧会への出品、個展を頻繁に開く一方、欧米の大学などで書道史、書法の講演や指導もなされています。

「彼等と対等に議論するには、英語も堪能でなければ」と、早くから英会話を勉強し、ネイティブ並みの英語で話していたそうです。南谷氏は世界を視野に入れて活動した、スケールの大きいアーティストだったのです。

「言葉として読めなくても、見る人を感動させるのは、変化に富んだ力強い線の表情」とおっしゃった南谷氏の言葉も、強く印象に残っています。(香川倫子記)

# 書のひろば

理事長 恩地春洋

## 第60回毎日書道展の概要(1)

平成20年度、第60回毎日書道展の概要、記念事業案が発表されたので紹介しておく。

### ◇第4次改革委員会の編成

- 委員長 吉田 成堂
- 副委員長 石飛 博光
- 陳列部長 百瀬 大蕪
- 委員 漢字 中村雲龍 水川舟芳  
赤平泰処

- かな 三宅相舟
- 近詩 船本芳雲 辻元大雲
- 永森蒼穹
- 大字 仲川恭司 柳 碧蘇
- 篆刻 遠藤 疆
- 前衛 中原芳秋 吉川寿一

(経過)  
(H19・10・19)

- ・平成16年、改革基本方針決定
- ・57回～59回展までの改革
- 1、漢字部Ⅰ・Ⅱ類同時出品認める。
- かな部Ⅰ・Ⅱ類に分ける
- 2、佳作賞の新設など賞の改革
- 3、作品集・名鑑の改題など
- 4、全部門の未表装鑑別(篆・刻を

除く)

- 5、国立新美術館使用の鑑別・審査展示
- 6、毎日書道会ホームページの新設と拡充など
- ・今回の協議事項
- 1、漢字Ⅰ・Ⅱ類の独立部門化は60回展は見送、出品点数の均衡化を目指す。
- 2、入選率の60%化は各展会場状況の現状では難しい。60回展50%かな部の「帖・冊子・卷子作品の出品促進」積極的に。
- 3、役員作品集の8月発行を促進、役員入選者名鑑は59回展通り。
- 4、鑑別・審査は59回展と同様。
- 5、東京展会場の都美・国立新美の陳列内容、会期(前期・後期)は変更。
- 6、毎日ホームページ59回展7月は月間ヒット数約600万件だった。
- 7、国際高校生選抜書展が高く評価された。
- 60回記念展は、会員賞は各部1点増(選考委員数は増やさない)

◇かな部の改革委(H19・11・19)

- 1、Ⅰ・Ⅱ類の分類
- Ⅰ類 3首以上、俳句5句以上
- 写経・和様漢字・臨書作品・卷子・冊子(帖)・貼りませ(文字の多少にかかわらず)
- Ⅱ類 1～2首、俳句4句迄、

大字臨書はⅠ類へ

- 2、当番審査員は、Ⅰ・Ⅱ類同数に。
- 3、Ⅰ類作品はすべて台紙貼り
- ・画仙紙作品、貼り混ぜ作品は作品仕上げ寸法A、B、C、Dの台紙に、卷子、冊子、帖作品は165×91センチの台紙に上部を大和糊で仮留。(不明は下谷洋子 評議員まで)
- ◇60回展の日程
- 12・7 理事会、評議員会
- 2・4～5 運営委員会
- 4・27 審査員、各副部長決定
- 5・12～14 出品受付

### 国際書法大展ソウル展

創立30周年を迎えた国際書法芸術聯合韓国本部が、アジア書道大展参加の毎日書道会を通して作品出品の要請があり、16団体が参加した。日本から25人が参加し、祝賀のため恩地春洋ら6名が紅葉のソウルを訪問交流を深めた。

- 会期 11月7日～13日
- 会場 世宗文化会館
- 参加 中国書法家協会、中国書法学会(台湾)、マレーシア、インドネシアなどが祝賀会に出席(日本) 恩地春洋、船本芳雲、阿部海鶴、糸賀晴夫、井上修身 鄭麗華

5・22	審査員総会、国立新美
5・23～25	鑑別 国立新美
6・27～29	審査 国立新美
6・30	文科賞予備選考 新美
7・8	都美開幕
7・9	日中女流展開幕式 都美
7・11	同 祝賀会精養軒
7・12	国立新美術館開幕
13:00 17:00	飯島春敬コレクション展示
17:00	第60回記念式典 赤アリ
	第60回展表彰式
	同 祝賀会

(以下次号)



盛大だった歓送迎会。翌日中国団は済州島観光のあと帰国。

- (中国) 尉天池、李嘯(台湾) 謝季芸
- 張順興(マレーシア) 黄金炳(インドネシア) 黄国楠ほか
- (韓国) 権昌倫韓国本部理事長

## 現代詩文書 (三)

広瀬舟雲

パリでの個展の時、作品を陳列するだけではなく、会場でいくつかの試みをしました。その内の一つが、①②の書作品について、まず何とよむか。

そしてどちらが西洋風に見えるか、どちらが東洋風に見えるか。と、訪れるフランスの人々に尋ねてみたことです。

私は①を西洋風(理由は、西洋の大石の橋に見えるから)

②を東洋風(理由は、日本の丸木橋のように見える)と答えるかと想定していたら、フランス人の大部分が、私の予想とは逆に、①を東洋風、②を西洋



広瀬舟雲書

①  
②

風と答えました。理由は、①の作品の形が日本刀に見えるからだといひ、②は、フェンシングの剣のようにしなやかだということでした。どちらでもなくアラビア風というフランス人もいましたが、まず刀剣の形をイメージすると、は思いもよりませんでした。

ちなみにこの作品は、「ボンスフ」とカタカナ4文字を組み合わせて書いてみたものです。ポとヌの横画をくっつけてみて橋のようにかたどり、片仮名4文字ながら一つの象形文字風にならないか試みてみた実験作です。「ボンスフ」とは、セーヌ河に架けられた大理石製の美しい橋の名前で、日本語で訳する「新橋」。名前は新橋だが、実はパリにある最も古い由緒ある橋として有名です。

’98年パリ個展出品作「ボンスフ」

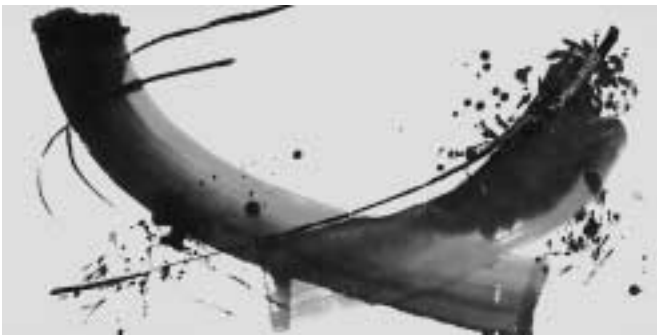
## 21世紀の書

—私の主張—

## 前衛書 (三)

阿部 蕙 芳

日本の芸術や芸能は、その元は中国から伝来した唐様の芸術や芸能であり、それらが我国に定着し、風土や習慣、また、先着し和洋化されたそれらの影響を受けて日本固有のものとなり、ひとしく「道」と称すべき境地に到達していった。



「極」 阿部蕙芳書  
(70×136cm)

書道もその一員であり、その修練がきびしさや理論、そして楽しさとして道の世界へ導かれていきました。「芸道」の世界には、精神、修練を根本としながら技術を学びます。そして個々の持つ美意識、感性を呼び起こさせ、芸術に向います。

前衛書は制作追求から得る必然性や偶然性、また、偶然がその空間に必然であるかの決定意識になる時、限らないその線と点に魅力を感じます。

作品の題名の有無について、観る方に任せるとか、無題でいい、と言う方が居られますが、私は、作者が構成する過程と想いを真剣に自身で受け取り、題名は記すべきだと思っています。

この作品は宇宙を想像し、二本の線の墨色の変化によって、遠近感を表現したかった。いかがでしょうか。



川崎小枝子  
(千葉)

「楽しい世界」

ふと目にした公報の千葉県立姉崎高校開放講座に参加できた事から始まった五十の手習いで紺紙金泥細楷と漢字仮名交りの世界にはまってしまいました。「継続は力なり」飯高和子先生の言葉と共にこれからも歩んでまいります。審査会員昇格は師と仲間のお陰、ありがとうございます。

(小枝子)

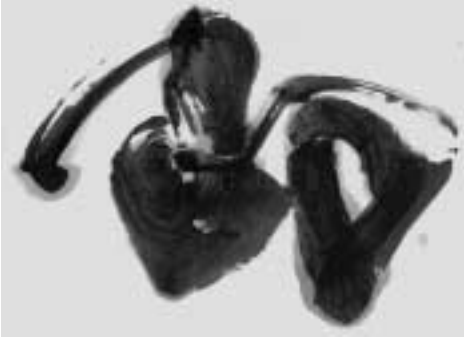


木村蕉苑  
(宮城)

「ポトリこぼした水滴が緑の森に虹をかけた」 北川山人詩 大自然の森の中で、森の妖精が微笑みかける。そんな森の息吹を表現したいと思いました。

これから、古典とじっくり向き合い、精一杯、精進を重ねていきたいと思っています。

(蕉苑)



大鹿洋江  
(東京)

「共」

文字から始まり、文字を忘れ、潜在意識の中から生まれた形、「共」です。「共」に勉強し、「共」に影響し合う書道芸術院の皆様にご心より感謝致します。師の古典への情熱を手本として、線を鍛え精進していきたいと思えます。

(洋江)



菊池昌春  
(大阪)

「移」

「書は人なり」恩地春洋先生が、よくおっしゃる言葉です。選んだ字に、墨の色に、一本の線に、今の私は出ているでしょうか。作品に素直に感情移入できるように、勉強を怠らず、経験を積み、努力してまいります。書を続けてこられた事に感謝しながら。

(昌春)





用紙 半紙普通判

注

漢字研究部競書作品は、左の法帖の中から

何文字臨書してもよい。

(掲載部分以外は不可)

※落款を必ず入れる

署名、もしくは

〇〇臨

(押印のみ可)

解説

薦季直表は、真賞齋帖のほか、鬱岡齋帖、三希堂帖などにも刻されている。魏の小楷(鍾繇)は、石刻や写経とは別の風韻を持つものとして古来、学書者に親しまれ、それより出づる豊かな香りや情趣を尊ばれた。(編集部)

原文

望。聖德録其舊勳。矜其老困。復俾一州。俾圖報效。直力氣尚壯。必能夙夜保養人。民臣受國家異恩。不敢雷同。見事不言。千犯宸嚴。臣繇皇。恐。頓首。謹言。

古筆鑑賞

45

かな研究部

小島切

(伝小野道風)

3

用紙・半紙普通判(料紙可)  
〈たて長に使用〉

〈よみ〉

こと(ね)年(に)不(尔)みねのまつか(可)せ  
(世)か(可)よみらし(な)奈(り)利(い)っ  
れのをより利(し)らべそ(曾)めけ(介)む  
まつか(可)せのおとに(尔)き(全)みだ  
(多)ることのねをひけ(遣)ばねの日の

こ(ち)こそ(曾)すれ

女三宮御は(者)こ(う)への御ぶ(不)く  
(久)に(尔)な(奈)り(利)た(多)ま  
(万)て九月に(尔)ぶ(不)く(久)ぬが  
(可)せた(多)まふを(越)き(支)か  
(可)せた(多)ま(万)て

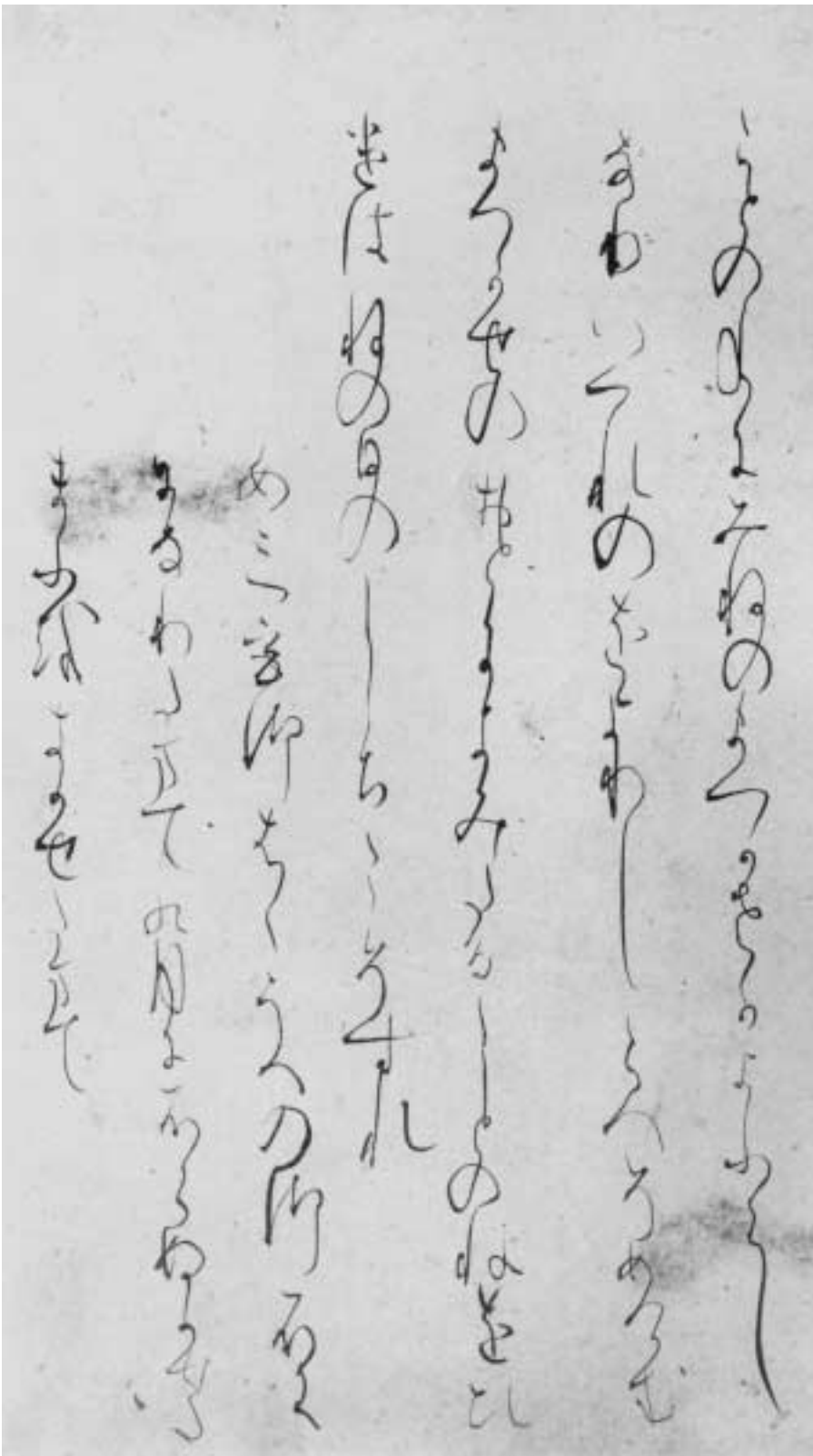
〈解説〉

小島切の墨色の変化はあまりなく、  
濃淡の美しさよりは、率意の疎密の流  
れで、華やかな線情の世界を呈してい  
る。大体一頁九行書きであるが、稀れ  
に裏面のところで七行書きがあり、文

字も大きく別趣の迫力を出しているこ  
ころもある。

書風や料紙からして、筆者は小野道  
風より下がり、十一世紀後半ごろと推  
定される。

・別紙を裁断して貼付は不可。  
※落款を必ず入れる。署名、  
もしくは〇〇臨  
(押印のみ可)



※上の古筆の掲載部分より歌一首以上を書く。(全臨も可)

漢字規定 初段以上 【二月二十日締めきり】 用紙 半紙普通判

最首翠風選書

萬里無片雲  
翠風

萬里無片雲

よみ (萬里片雲無し)

書体||自由

## 習い方解説 (三)

### 最首翠風

萬里無片雲

(萬里片雲無し)

隸書体は読み易く、デザイン性もあるので店の看板や、最近ではテレビの字幕にもフォントとして使われています。ただ、これらは文字のデザイナーの手によって作られたものですから、私達書の古典を知るものにとっては、何とも見るに耐えないシロモノです。

私達は無限の美や、いのちをそこに留めている古典を学び、正しく文化を継承して行きたいもの。例えば同じ八分隸(波磔のある隸書)でも曹全碑と礼器碑の書風は異なります。書者の人間性や、書かれた目的、古典一般に言えは時代性、気候風土、書者の置かれた環境、教養などによって書風は決定づけられるでしょう。しかし、どんな時代の書にも美への意識、生命感が感じられます。



一以貫之 よみ(一)を以(も)って之(これ)を貫(ぬ)く

書体||楷書

### 習い方解説 (三)

稲垣小燕

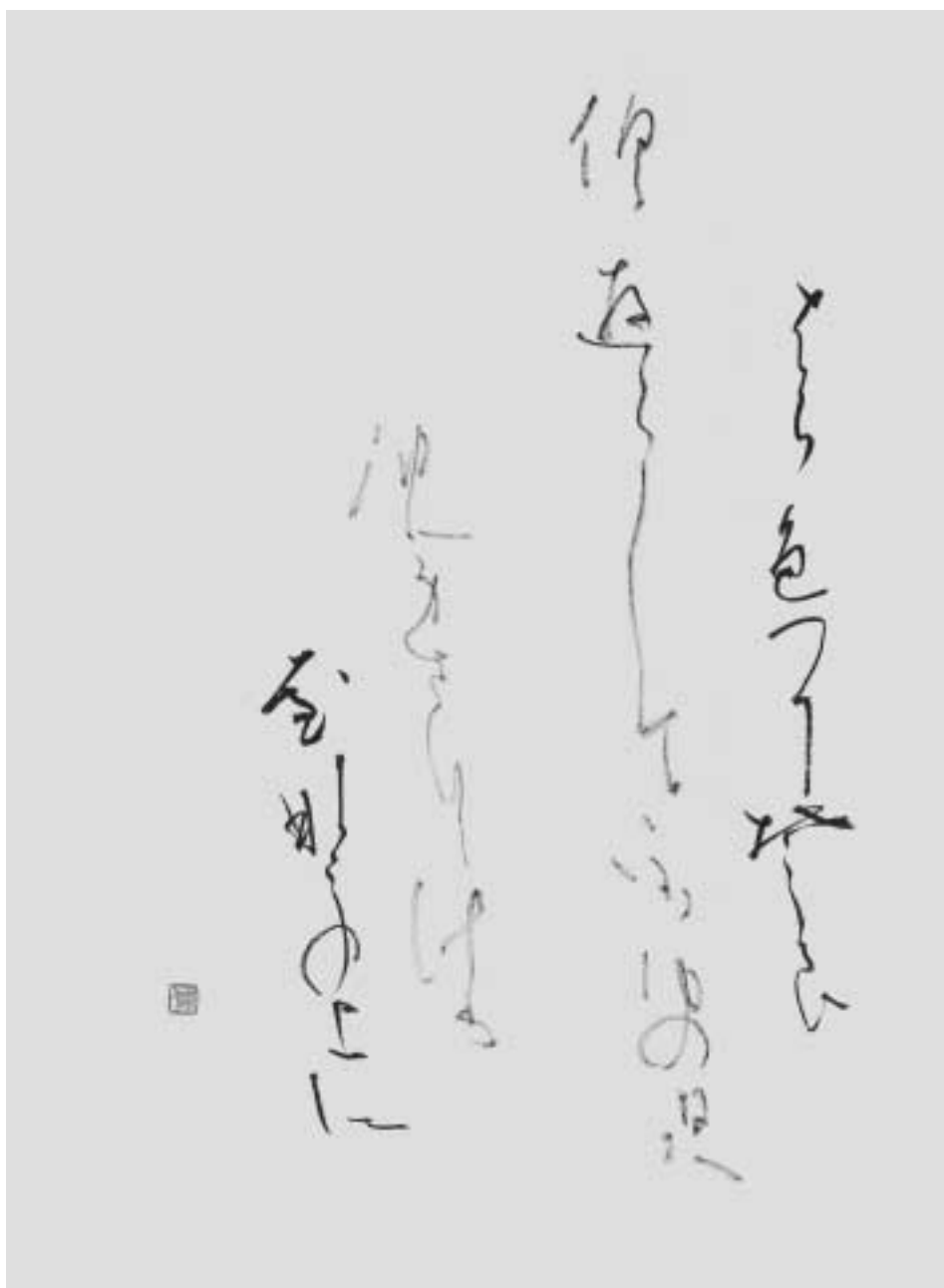
一以貫之  
(一)を以(も)って之(これ)を貫(ぬ)く

一貫して変わらぬ道を進むこと。

ゆるぎない心で、じっくりと物事の本質を貫く姿勢を表現したいと思います。

筆勢内に秘め、鋭い線質を心がけました。四文字のバランスに特に気をつけて書きました。

『孔子廟堂碑』の中にこの語句が出てきます。参考にしてください。



### 習い方解説 (三)

黒川 江偉子

ばら色に空くゆらして冬の日は  
沈みさりけり屋なみの上に

(窪田 空穂)

この歌を読むと誰にでもそれぞれ心に浮かぶなつかしい景色があると思います。ばら色に染まる空、影絵のような家並、真紅の冬日は、あつという間に沈みます。

散らし書きの形式は特にきまつた法則はないといわれていますが、古筆の三大色紙、また、元永本古今和歌集等を参考にしたり、江戸時代の頃からいわれた、木立、下り藤、雁の行、雁の乱れ等をふまえて創作します。

作品を如何に引き立たせるかは、余白を美しく出せる、散らし書きの構成が基本です。

よみ方 ば(者)ら色に(耳)そ(楚)ら(良)く(俱)ゆ(遊)らしてふゆの日は(八)

沈み(身)さりけり(利)屋な(那)み(三)の上だ

創作

かな規定 秀級以下 【二月二十日締めきり】 用紙 半紙タテ1½ (料紙可) (たて32センチ・よこ12センチ)

掲載写真のうたを全臨、または部分(二字以上の連綿)を臨書する。

高野切第三種  
(掲載写真縮小93%)

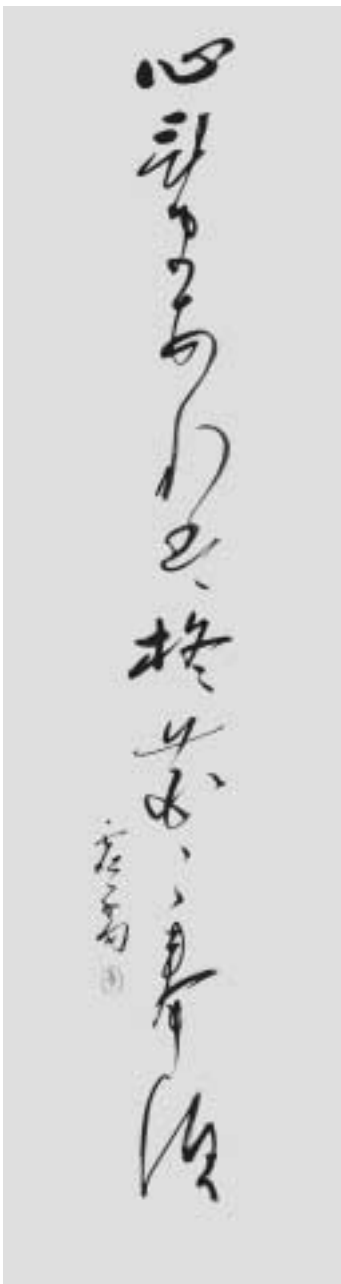


よみ方

よひのまにいでくいりぬるみか(可)づきの  
われて(三)ものおも(毛)ふころに(尔)もあるか(可)な(那)

かな条幅規定 【二月二十日締めきり】 用紙 小画仙紙半切(料紙可)

平川峰子選書



よみ方 心ひ(飛)まあれば(盤)桜花(こぼ)奉(す)須(須) 虚子句

創作

### 習い方解説 (三)

平川峰子

心ひまあれば桜花<sup>桜花</sup>こぼす

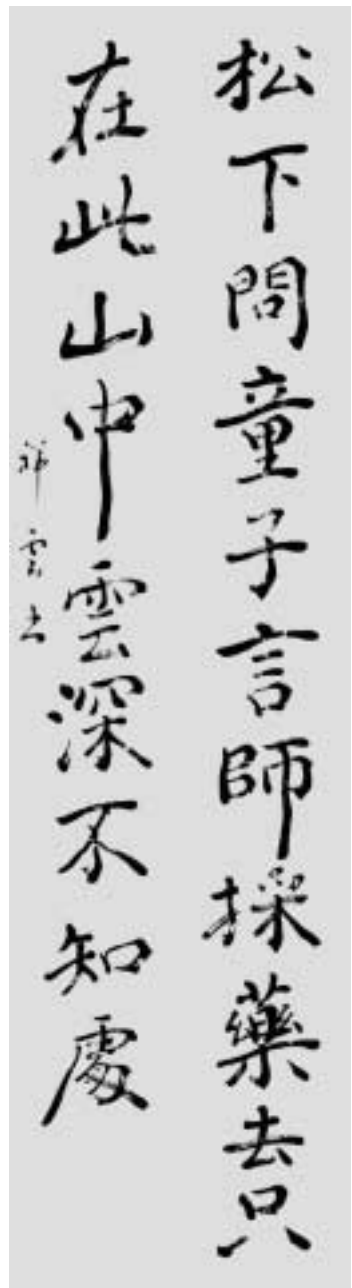
(高浜虚子)

桜の花は白色の小花でよい匂いを放つ。「心ひま」は潤筆のため、にじんで太い字になっている。潤濁の変化も作品のおもしろい要素。一行書きにしてみたが「心」をひらがなに換えて右下から書き始め「桜」を二行目上から書く構成にすることも。墨つぎした文字は小さ目に。連綿線を入れたが俳句の場合連綿は少なくてよいと思う。

\*たて形式に限る

漢字条幅規定 初段以上 【二月二十日締めきり】 用紙 小画仙紙半切

大野祥雲 選書



松下問童子 言師採藥去 只在此山中 雲深不知處

(松下の童子に問えば言う師は藥を採りに去って只此の山中に在るも雲深うして処を知らずと)

書体||自由

漢字条幅規定 秀級以下 【二月二十日締めきり】 用紙 小画仙紙半切

小川弘舟 選書



居身百尺樓上 放眼萬卷書中

(身を百尺の樓上に居き 眼を萬卷の書中に放つ)

書体||自由

### 習い方解説 (三)

大野祥雲

「隠者を尋ねて松の木の下で、召使いの童子に出逢い、聞けば先生は藥草を採りに去ったという。いずれこの山中にいるのであろうが、雲深く閉じて、どこにいるのか、まるで分からない。唐・賈島詩。」

あまりにも有名な幻想的な詩です。簡潔な点画で明るく風通しのよい造形にと思ったのですが、結果は逆になったようです。

### 習い方解説 (三)

小川弘舟

「世俗を離れ高樓に身をおき、万巻の書を読む」優雅な詩です。今月は、顔真卿の楷書を参考に書きました。力強く堂々として、字形は向勢で縦長、用筆法は直筆で「蚕頭燕尾」と言われ、「起筆を蚕の頭のようにまるめて入り、波法の払いを燕の尾のように抜く」ということです。「書道芸術552号から554号」参照。

習い方解説 (三)

今回は、「徒然草」と並ぶ隨筆文学の傑作とされている「枕草子」です。十二月なので「冬はつとめて。…」の部分を書きました。

学生時代に、「春はあけぼの」「夏はよる」「秋は夕暮」「冬はつとめて」と暗誦しながら「つとめてとは、早朝のことなんだ」と古文の難しさ、おもしろさを感じたものでした。

平安文学の味が伝わればと、かな文字を連綿し、やわらかな筆致を意識して書きました。

ご自分の心地よい連筆で連綿したり、放ち書きにしたりして、書いてみてください。濁点の打ち方は、連綿が終わってから、リズムよく打つとよいでしょう。

※落款を入れ忘れないようにしてください。(落款は自分の名前を入れてください。)

冬はつとめて。雪の降りたるは、  
いづきにもあらず。雪相のいと白きは、  
又せらぎもいと寒もた。火なども心ぎ、  
おこして。炭もそ渡りもつとまじ。  
昼になうて。わろくゆるむていけば  
火桶の火も白き灰がらになうてわろく。  
清少納言「枕草子」より、書

用紙IIはがきの大きさ、白色のもの、黒インク使用のこと

書体II自由

ホープ作品  
各部総評

NO. 557

ペン字部 師範 千田 白香

律動的な流れ、漢字かなの調和も美しく、細部まで神経の行き届いた雅趣に富む作品です。

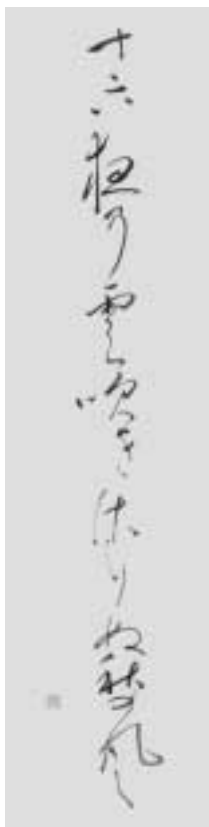
◎ペン字部総評 使用するペンの性質を把握したリズムのよい作品がふえました。下敷にも意を用いた適度の弾力あるものを。(小扇評)

ホトリゲとって新しいブドウ酒を  
飲ませようころろがウーインの森林の  
ふもとにありませぬ、こゝでは町の  
レストランと違って、少くも無礼講に  
なすことも許されませぬ。白香書

かな条幅部 二段 櫛山かつ美

紙幅に対してやや文字の振幅に乏しいが、楚々とした筆致でかなとしての流れを汲み期待させる作。

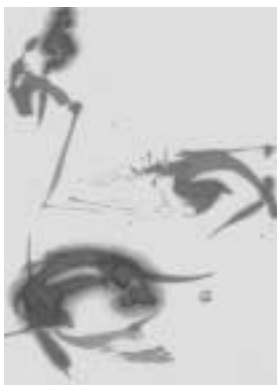
◎かな条幅部総評 今月は昇試のためか力作が少なく残念でした。一行書はいかに点画を横に張り出すかがポイントです。(洋子評)



前衛書部 特選 高原 梨秀

澄んだ墨色、三点の構築線はリズムに乗ってダンスをしている軽やかさを感じる。空間も抜群。

◎前衛書部総評 墨色も筆勢もすばらしい。楽しい作品が一杯。構成にもう少しの方あり。(蕙芳評)



漢字条幅部 師範 星野 英蘭

筆先を紙に突き立てて響きの高い線が余白に緊張感を生み、リズムに乗った快作。

漢字部 師範 小沢 泉佳  
王鐸を彷彿させる行草表現はリズム感に溢れ、紙面に動きがあつてよい。落款ももう少し丁寧な。

◎漢字部総評 半紙という限られた紙面での表現では、大胆な取り組みは難しいが参考例に頼りすぎず、自分なりの工夫を。(大雲評)



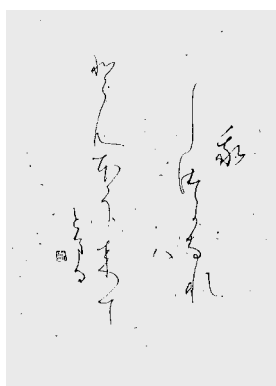
かな部 師範 高橋 賢雲

大胆な動きと墨色の変化の美しい作品です。その上、古典に裏打ちされた線質は澄明で深淵です。

◎かな部総評 かな作品に対する理解が急に深まった印象のものが増え感激です。今後は、独創的な展開を希望します。(明子評)



◎漢字条幅部総評 よく書き込んで自分のリズムで一貫したものは見る者に安堵感を持たせる。習熟を心がけたい。(春洋評)



今月の

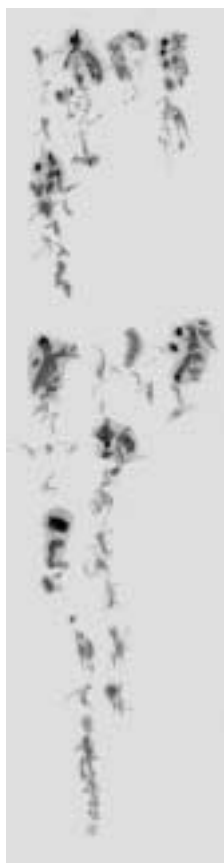
# 特別研究部優秀作品(特選)

現代詩文書  
(炎佳)

佐藤華炎  
「室生犀星の詩」

漢字  
(玄穹)

尾形紅霞  
「登樓萬里春」



佐藤華炎書

◆上部から下部の集団への構成が面白く、楽しいリズムを奏でる。青淡墨の淡いにじみが効果的で作品に広がりや核となるポイントを形成して妙。(大雲評)

◆余白の生かし方がいつも斬新で目を奪うが、これも線やタッチの諳さを別にして意外性で群を抜いている。やや凝りすぎて読みにくい面も。(洋子評)

◆口ずさむような紙面を作り、それに合わせて墨色に変化を見せ、小さい字ながら紙面を一体化して見せてくれた。心の流れを感じるよう。(倫子評)

◆変わった構成が先ず目をひく。青墨(宿墨)の墨溜りと筆の割れた筆触の交響も楽しい。これだけ筆先が乱れても騒がしくないのは墨の効果か。(春洋評)



尾形紅霞書

◆一行、左右の振幅で構成した破体書。渴筆は明るく爽やかだが、不安定な縦長の「里」が落ちつかない「春」字の日が弱くしてしまらない。(春洋評)

◆柔らかく広がりある渴筆が紙面に動きを与えて一行書の平凡さを救っている。上部ののびやかさに対し、下部二字は考えすぎたか。(大雲評)

◆伸縮に広狭と、思い切った動きで書体を違え楽しい。伸びやかな広がりに対して圧縮された部分が適当だったかどうか。でも新鮮でした。(洋子評)

◆大きく活躍する筆意とそれを受ける感じに引き締まった構成で五字の流れを楽しく見せてくれた。空間の生かし方をもう少し考えて見て。(倫子評)

## 総評

香川峰雲先生の生誕百年記念展で、先生の刻印が、その現代性から大きく再評価されました。前衛書に捺す落款印は、従来の刻風では調和しないため、峰雲先生独自の作風が形成され、春蘭先生、倫子先生をはじめとする前衛書作品に調和する風格の印が刻されました。それが峰雲先生の篆刻の特長です。

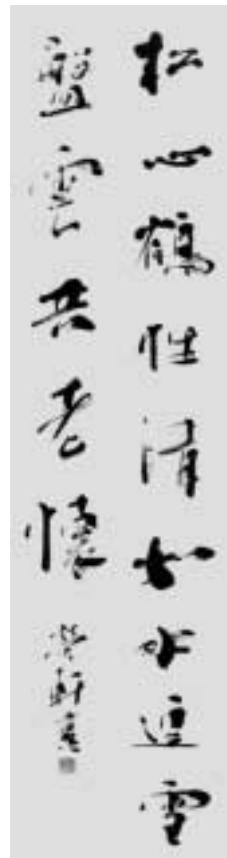
今回は80点(漢22、か6、現32、篆1、前19)が出品されました。審査の過程で、作品と印の調和について話題となりました。作風と印の風格が不釣合の作品が目につきました。落款印にもっと心配りをして欲しいものです。捺印位置も工夫してください。(萬城)

〈特選候補者〉

前	前	前	前	現	現	現	現	か	漢	漢	漢	漢
若葉	伊那	四谷	翠柳	大雲	翠柳	もく	翠苑	卯月	漢	漢	漢	漢
工藤	矢野	角田	鈴木	長島	加藤	西川	佐々木	前田	漢	漢	漢	漢
山房	弥生	悠香	翠夢	春景	櫻雨	藤家	木豊苑	まさ美	漢	漢	漢	漢
									漢	漢	漢	漢
									漢	漢	漢	漢
									漢	漢	漢	漢
									漢	漢	漢	漢

漢字 (千葉)  
大内 熒 軒

「七言二句」



大内 熒 軒 書

◆余白を広くとり、弾力あるリズムで淡々と書き進める。静かで味があるが、型破れなものに果敢に挑んで欲しいと思ったりも…。(洋子評)

◆筆圧の強さが短い線の中に生かされ作品に流れを生じている。印の大きさや字の雰囲気等を統一したら本文がもっと生き生きしたのでは。(倫子評)  
◆行書単体で、静かにぼつぼつと縦画と横画を意識した字形。品よくまとめた明るい作となった。署名やや大きい感もする。(春洋評)  
◆味わいある筆致での行書単体二行は余白の効果もあり爽やかな仕上り。やや硬めの筆を使用か、小気味よい打楽器のリズムを感じさせる。(大雲評)

前衛書

(清流) 渋谷 充 律

「無」

◆上部から流れるような動きで最後まで息もつかせず見せてくれた構成。印の場所だが切角の余白を寸断してしまった感、動きに併せた所を。(倫子評)  
◆タッチ鮮かで墨色を生かした手腕りっぱ。上部と下部共にトリミングして上下のつながぎを一層鮮かにした。静かで安定感のある作となった。(春洋評)

◆上部の鮮明な動きが爽快である。下部の処理はもう少し省略した方がよかったか。連筆のリズムの大きさと大胆な筆致を評価したい。(大雲評)  
◆上下の墨量の調子が少々もの足りないが、力感に漲る線のコクに筆者の並々ならぬ勢いが窺える。部分により表現法を明確に変えて奥深い。(洋子評)



渋谷 充 律 書

現代詩文書

(二貫) 鈴木 博 貫

「啄木鳥」



鈴木 博 貫 書

◆大胆なタッチで、線の大小、潤濁、構成としては面白いし、余白のつかみ方は巧みである。知的な作品制作態度として受けとめた。(春洋評)  
◆白秋の詩の題名を上部に大書し、下部二行の構成が眼をひく。潤濁の変化を明瞭にして、筆融の微妙な味わいを表現している点に魅力あり。(大雲評)  
◆現代詩のこの表現法は決して新しいものではないが、白の扱え方は分量、トボけた結体に線の軽妙感が絡み合って独自の風情を醸し出した。(洋子評)  
◆巧みに「にじみ」と「構成」を組み合わせ詩情を味あわせてくれた楽しい作品。書き初めは力身すぎたか少々重い感じがあったが…。(倫子評)

漢字研究部  
(楽毅論)

選評 小林 琴水

今月のホープ作品



木下美都子

漢字研究部 特選 木下美都子

原帖の特徴をよくとらえ、確かな用筆で紙に  
くい込んだ線、見事な臨書。筆者はリズム  
にのせ、筆先を着実に使いこなせているのに  
は心ひかれる。

◎漢字研究部総評 楽毅論は気脈が切れ  
ない様、息長く、あわてず、筆先を遊ばせな  
がらゆったりと書くこと。

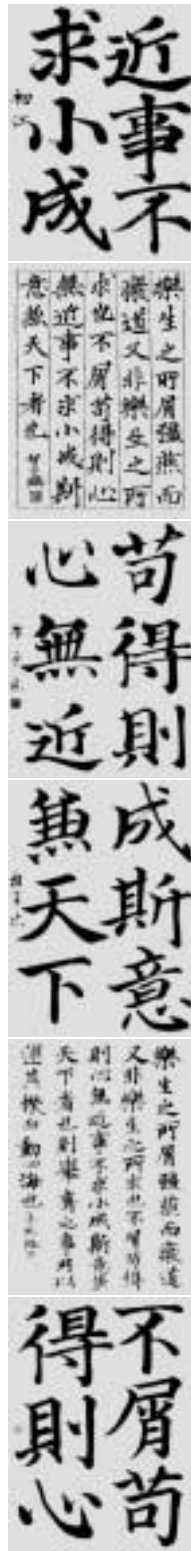
リズムにのると、とても楽しい臨書作品と  
なるでしょう。線の細い(ピリッとした強さ)、  
太い線はゆったりとのびやかに、字形のバラ  
ンスも魅力的である。半紙に四字、六字、八  
字、細字、それぞれによく研究された作品が  
多かった。筆先が常にピッと立っていること  
には注意したい。



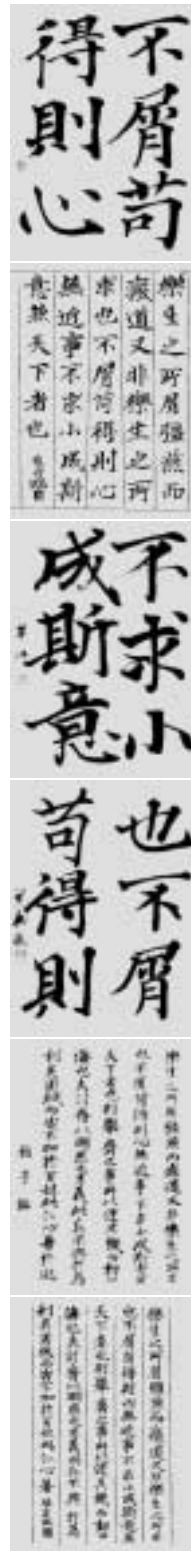
史優美政雅  
紀子紀和邦  
みどり



恵翠玉松節  
徑子露鳳苑  
桂香



初智哲雅与  
江子子子  
吉恵



美紫翠琴雅  
舟江爽子  
皓泉



# 書道芸術院創立60周年記念

## 役員作品巡回展

併催 関西総局展

会期 平成19年9月4日(火)～9月9日(日)  
会場 大阪市立美術館

大阪市の文化を紹介する大阪市立美術館で、例年開かれている57回玄遠社主催の展覧会、二室のうち一室を借用して、書道芸術院創立60周年記念役員作品巡回展を開催することになった。50名の作家のすばらしい作品群を陳列、



恩地理理事長作品解説



会場風景

別にそれらをもりたてるように関西のメンバー200余名による書道芸術院の毎日展入選以上の作品を展示することにした。砂本社中、畑中社中、岩崎社中、などのご協力により、強力な展覧会が

構成されることになった。

来賓の方々にも、9月4日(火)午前中は恩地理理事長による巡回展の作品解説が行われた。

午後2時、場所をかえて天王寺都ホテルで祝賀会が開かれた。役員、会員、参列者併せて145名の人々が一堂に会し、小伏小扇さんが司会担当、主催者側のあいさつの後、尋牛会の水嶋山耀先生、関西担当大使の天江喜七郎様、日展会員の江口大象先生、評論家の田宮文平先生のお話を伺い、最後は毎日新聞社の井上修身様にしめくっていただいた。  
(関西総局長 山下皓映記)



関西総局長あいさつ



会場風景

## 書道芸術院創立60周年記念 役員作品巡回展 北海道支局

会期 12月4日(火)～  
12月9日(日)  
会場 札幌ギャラリー  
大通り美術館  
支局長 齋藤雨城

# 書道芸術院創立60周年記念

## 役員作品巡回展

併催 北関東総局展（埼玉・栃木・群馬）

会期 平成19年9月21日（金）～9月24日（月）  
会場 前橋市民文化会館 大展示室

5年に1度の巡回展が再び巡って来た。群馬には高崎と前橋に大きな会場があるが、今回は前橋の「市民文化会館」を1年前に予約する。20日陳列、21日開幕。

（初日）地元の上毛新聞社の記者が取材に見える。県内で開催される社中展あるいは個展は年間およそ60、その中身は等しく師風に統一されているのに対して、本展は五つの部門からなる総合展のため多彩にして密度が濃い。院の活動を広く江湖に問うとともに会員の手技の向上と親睦を旨とすることを伝える。

（二日目）早速、朝刊に記事が載る。午後2時から恩地理理事長による「作品研究会」が1時間にわたって開かれ、一般の方も含めて100名に垂んとする参加者で賑わう。以下は理事長のお話のあらましである。

「群馬は大澤雅休・竹胎、中島邑水、山本津水、横堀艸風といった大家を輩出し前衛書の盛んなところ、その開拓者精神が書道芸術院を支えている。」



会場風景

漢字部―伝統の上に新しいものを積み上げる時期に来ている。かな部―関東のかなに刺激を与え、関西にも新しい力となって食い込んでいく。巡回作品―目標を明確に持つこと。自分の作品が出来上がったと思ったら危険、燃えるもの、力強さの伝わってくるものが大事。構想としては感覚的な



作品研究会

作品、心理的な作品、そして余白について考えることが大事。最後に「人は成長していく。生きている間にどれだけの仕事ができるか、作品がその証しとなる」と結んで終わる。

続いて午後4時から内外のお客様を招いて祝賀会を開催。浜谷芳仙常務理事の「総局と支局の差をまざまざと見せつけられた」という発言が印象的だった。院関係では、他に村野大仙、大野祥雲、黒川江偉子、石井明子、津田和秋の皆さん方に錦上華を添えていただく。

（三日目）前線の影響か夜来の雨が終日続く。そんな中、足を運ばれるお客さんは有難い。（最終日）今回、県書道展の委員・委嘱あわせておよそ60余名に案内ハガキ

を出すも意外に来場者数が伸びない。思うに同ハガキを手にしたとき、県外の団体が群馬に進出して展覧会開催というように単純に受け取られたか。よって地元出品者134名の姓号一覧も添えて発信したらまた違っていたかも知れないと反省する。午後3時閉幕、続いて作品撤去・搬出をもって大事業の幕を閉じる。院の役員をはじめ事務局の方々には色々とお世話になりました。ここに更めて深謝申し上げます。ここにさせていただきます。

（北関東総局長 西林兼宣記）



祝賀会

# 書道芸術院創立60周年記念

## 役員作品巡回展

併催 東京総局展

会期 平成19年10月2日(火)～10月7日(日)

会場 東京銀座画廊・美術館

秋とは名ばかりの連日の猛暑に悩まされた日々がこの記念展の為にふと息をひそめたように爽やかな秋晴れとなりました。

書道芸術院秋季展と同時開催という事で、昨年2月11日より企画立案してまいりました。

秋季展と同じ館での願い通りに、東京銀座画廊、美術館で、役員作品巡回展、東京総局展を開催致しました。

東京の場合、特に銀座という事で、他の総局、支局と事情が違う為、役員作品の展示も、他の広々とした美術館で拝見するのと違い案じましたが、密度濃く、先生方の精魂込めたお作が身近に拝見出来ました事は大変良い勉強になりました。

また東京総局展は東京、神奈川の審査会員、審査会員候補、無鑑査の会員の方々に、半紙大の作品を出品していただき、それぞれ心を込めた作品で、書道芸術院の漢字、かな、現代詩、篆刻、刻字、前衛、とバラエティー溢れる展示となり、大変好評でございました。



会場風景

6日は秋季展の今回から始った審査会員候補公募作品の表彰式、研究会が行われました。

表彰式は、恩地理理事長のご挨拶から始まり、研究会では辻元大雲先生の進行で、菊花賞受賞者の作品への想い、苦心談など次々に発表され、選考委員の大野



研究会（秋季展会場）

祥雲先生、辻元大雲先生、浜谷芳仙先生、宮澤梅径先生、かなの黒川、と種々助言意見などあり、まとめ講評に恩地理理事長からの大変有意義なお話があり、会場を埋めた会員も熱心に活気溢れる時間を過ごしました。

その後祝賀会には、来賓の毎日書道会専務理事寺田健一様、評論家麻生泰久様、毎日書道会理事岸本太郎様からの温かいお祝辞をいただき、毎日書道会理事貞政少登様の乾杯、多勢のお客様もお出でいただき、秋季展と合同での華やかな祝宴を盛大に出来ました事も何よりの喜びでございました。

馨香会展もつぎの会場で開催されモダンなお作品に季節の花が溢れ、連日沢山の来場者を呼び、賑やかにご一

緒出来、嬉しく存じました。  
この東京総局の巡回展にあたり、本部の先生方、東京総局の会員、スタッフの皆様への厚いご協力ご後援をいただきました事、感謝を込めて心より御礼申し上げます。

(東京総局長 黒川江偉子記)



会場風景

一役を終えて

木犀香りけり

江偉子

競書出品規定

締切日 1月20日  
規定部

部門	字	漢	な	か	漢字条幅	かな条幅	ペン字
段級位 用紙	初段以上 半紙	秀級以下 半紙	初段以上 半紙	秀級以下 半紙	初段以上 半紙	10師 級	10師 級
書体・内容	創作 (書体自由)	創作(楷書)	創作	臨 書 (写真掲載部 分を全て書く)	創作 (書体自由)	創作 (書体自由)	書体自由

●前衛書部 審査会員は  
現代詩文書部 出品不可  
半紙縦使用に限る、一人一点  
(両部門に出品できる)

●研究部(審査会員は出品不可)

部門	漢字研究	かな研究
出品資格	審査会員 候補以下 (審査会員 は不可)	審査会員 候補以下 (審査会員 は不可)
用紙	半紙	半紙
書体・内容	掲載の古典 の臨書、文字 数自由(掲載 部分以外の 箇所は不可)	掲載の古筆 の臨書、歌 一首以上を 書く、全文 も可(掲載部 分以外の箇 所は不可)

●特別研究部(審査会員も出品可)

特別研究作品	出品資格	用紙	内容
誰でも 出品可 (審査会 員を含む)	毎日展 公募サ イス以 内	毎日展 公募サ イス以 内	漢字・かな・ 現代詩・篆 刻・前衛書 の各部門を 含んだ創作 作品競書
※「特別研究作品」出品券を貼付 ※「特別研究作品」出品券を貼付 ※「特別研究作品」出品券は使用で きない	6尺以 内(2× 6尺以 内)	6尺以 内(2× 6尺以 内)	篆刻は印 影に落款を 入れて応募 ※各部を通 じて一人 一点
	可縦横 自由	可縦横 自由	刻字は不可

●出品資格 高校生以上

●月例競書作品出品の心得

一、締切日必着厳守

二、月別出品券を貼付していないパ  
ーコード券は認めない

三、月別出品券のコピーは不可

四、(一)初めて出品のときは「新」

(二)回目出品のときは「10」

(三)〇印は昇級

(一級上の級を書く)

(四)「締切後着」・「段級不明」・  
「課題違反」・「落款なし」

の作品は審査対象外とし、氏  
名を掲載しません。

※▲印段級誤記入

バーコード出品券についてお願い

\* 作品からはがれないように、右下  
にしっかりと貼り付けてください。

\* 月別出品券の部別を間違えないよ  
うに貼ってください。

(※スティックのりははがれやすい  
ので、ヤマトのりを)使用ください)

\* 記入する数字は、

級位は算用数字1、2、3…

段位は漢数字 初、二、三…

で書いてください。

\* 級位の方は、出品する月の本誌

(最新号)で成績を調査確認の上、

級を記入してください。確認できな

いときは、現在級を書き「未調査」

と明記してください。

◎郵便物・清書・送金・一般事務等は

101-0031 東京都千代田区

東神田一―一六―一七

神田芝崎ビル三階

財団法人書道芸術院

電話(〇三)三八六二―一九五四

FAX(〇三)三八六二―一九五七

お問い合わせ、ご連絡は、

月曜日～金曜日九時～十七時の間に

お願いします。(土・日・祝日は休み)

送 料

一か月の購読部数が

1部～9部までの一回の郵送料

1部	68円
2部	84円
3部	92円
4部	100円
5部	116円
6部	124円
7部	140円
8部	148円
9部	156円
10部以上	送料免除

平成十九年十一月二十五日印刷  
平成十九年十二月一日発行

定価 一部 六五〇円

編集兼 恩 地 春 洋

発行人 株式会社リンクス

印刷 小沢写真印刷株式会社

発行所 (財)書道芸術院

〒101-0031 東京都千代田区東神田一―一六―一七

電話(〇三)三八六二―一九五四

FAX(〇三)三八六二―一九五七

振替 〇〇一四〇一―三三〇五八

http://www.jlincs.co.jp/shogai/